



市民病院の平成 20 年度実績と今後の展望

平成 20 年 4 月に小野田市民病院と山陽市民病院が、山陽市民病院の老朽化のため避難的に統合し山陽小野田市民病院になりました。この度、平成 20 年度の診療等の実績が確定しましたのでご報告します。

受診患者数は、延べ総数で 18 万 3 千人を超えており、内訳は外来患者が約 11 万 8 千人、入院患者が約 6 万 6 千人。このうち、65 歳以上の方が約 10 万人 (55%) でした。さらに、健診と人間ドックで 5 千人を超える方を診ており、利用者は、合わせて 19 万人近くになりました。また、時間外患者数は 4,568 人で、1 日平均 12.5 人。手術の件数は 991 件、分娩は 227 件、透析患者数は 7,360 人でした。この結果、医業収益は 37 億円を超え、収支比率は 99.9% でした。今年度に入り、医業収支はさらに改善していますので、単年度だけで見れば、経営的にも順調に経過しています。

先日発行された「週刊ダイヤモンド」(8 月 15 日発行) という雑誌に“頼れる病院”のランクが記載されており、山陽小野田市民病院は山口県内で 9 番目でした。1 番は山口大学医学部附属病院でしたが、自治体病院の中では県立病院の次で、市や町の 15 の自治体病院の中ではトップでした。

ところが、一方で現在の本病院の懸念は、病院施設の修理・補修に次第に経費が掛かりつつあり、数年先には病院としての機能が維持できなくなるおそれがあるということです。大掛かりな改修は先延ばしにして目前の修理に留め、新病院ができることを期待して、利用者の方にも忍んでもらっています。

全国的には、各地で病院の崩壊が叫ばれており、崩壊した病院の実情を見ても、意外に速い速度でその道を辿っています。つまり、一

旦崩れ始めたら一気に崩壊している病院が多いのです。一方では、病院の崩壊をくい止めている例もあります。後者は、いずれも病院が崩壊し始める前に、住民の方が自発的に病院と良好な信頼関係を築こうと努力されているところです。例えば、兵庫県の柏原病院では、小児科が無くなることに危機感を覚えたお母さんたちが、小児科を守るために立ち上がり、結果的には以前よりも小児科医が増えてきました。何事も、早めに対策を講じることが危機管理の要点です。

山口県内も全国の趨勢と同様に、どこの病院も苦しい経営を強いられています。県内の地域医療の状況は、地域によってかなり大きな差があります。本地域は総じて恵まれていますので、他の地域から羨ましがられている状況であり、医師の不足が深刻な地域へ、医師や医療従事者を分散することを望む声も聞こえてきます。

本市の地域医療をどのようにするかは、結局は地域住民の方の意思にかかっています。私は本市の病院事業管理者として、このままでは、地域医療の崩壊が迫っており、それをくい止めるには、新病院を早く建設し、今後も安心して医療が行える環境整備をしておくことが必要であると確信しています。

新病院の建設には、場所や経営形態など、いろいろなご意見があると思いますが、病院がほぼ独力で経営できて住民の方の経済的な負担を軽減することが、病院の安定的継続性という観点から重要な要素であると思っています。新病院建設に向けてこれから種々の関門があると思いますが、よろしくご高配をお願いします。地域住民の力が地域の医療を守ります。

(病院事業管理者 河合 伸也)